聴覚は最後の時まで保たれる

修琴堂大塚医院　渡辺 賢治

今回も番外編で失礼します。本日は聴覚の話です。

聴覚とは？

聴覚というとどのようなイメージでしょうか?5感、すなわち視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚のうち、聴覚に頼るのは割合少ないと感じているかもしれません。もちろん状況や職業によってさまざまではありますが、日常生活を送るうえで、聴覚に頼る割合は7％というデータもあります。

聴覚は空気伝導のほかに骨伝導があります。通常の聴覚は、音が生じる空気の波が、鼓膜を振動させ（気導）、聴覚神経に伝わります。一方骨伝導は、音の振動が頭蓋骨から直接聴覚神経に伝わります。この骨伝導は意図的に起こさずとも日常で常に起こっており、自分が聞く自分の声は声帯から発した音が、空気を伝わって自分の耳に伝わったもの（気導音）と発した声が直接頭蓋骨に伝わる骨導音が合わさったものです。録音した自分の声に違和感を覚えるのは、録音機器のマイクは空気伝導によって伝わる音のみを録音するからと言われています。こうした骨伝導を利用した、イヤホンや補聴器、電話機はどんどん進化をしていて、鼓膜に障害があるような難聴の方には朗報となっています。何よりも耳を塞ぐ煩わしさから解放されるのは良いですよね。骨伝導のイヤホンは、車や自転車のクラクションや電車などの環境音が聞こえる点で、事故に遭う危険は減ります。その一方、語学学習や音楽を楽しもうという時には、環境音に邪魔されて集中できません。場合によって使い分ける必要があります。さらに最近では頭蓋骨振動を必要としない、軟骨伝導があることも分かり、軟骨伝導を用いた機器が開発されています。

聴覚は最後まで保たれる

日常生活の経験からはあまりピンとこないかもしれませんが、患者さんと接する際に聴覚は非常に重要です。医師になって、最初に教わることの1つに、「患者さんの聴覚は亡くなる瞬間まで保たれているから、決して不用意なことを言わないように」という戒めです。臨終の場面で、ご家族から、亡くなった後の手配などを相談されることがありますが、看取りの瞬間までは、励ます、もしくは感謝の声掛けを続けるようにご家族に伝えます。

笑い話ですが、急に容態が悪くなった患者さんがいて、ある医師が脳出血を起こしたのではないかと疑い、CT撮影のために搬送していた時に、呼吸が止まったように見えたので、「あれ、亡くなっちゃったのかな」と言ったところ、患者さんが「まだまだ」と言ったというエピソードもあります。胎児の発達でも聴覚がいちばん最初に発達する、という説もあり、聴覚というのは不思議なものです。

最後の声かけが大切だと思った瞬間

個人的な経験で大変恐縮ですが、母の看取りの時です。不治の病で、だんだんと衰弱していきましたが、漢方はしっかり飲んでくれました。自分の死を悟った母は亡くなる9日前に、「私はもう死ぬから」「そんなことないよ」「自分で分かっているから」「死ぬ時は3人の子供たちに見送られたい」「お父さんのことが心配」という会話をしました。3人の子供たちに見守られて死にたいという希望を持っていた母は、子供たちが集まれる日曜日に臨終を迎えられるように、金曜日から一切の薬と食事を拒否しました。日曜日に子、孫らが集まり、夕方呼吸が荒くなりました。母の希望通りいくかと思ったのですが、その日は持ち直しました。翌日は月曜日で兄たちは仕事に戻り、私は仕事を休み、実家に父とおりました。夕方5時くらいに呼吸が荒くなり、いよいよその時が来たことが分かりました。呼吸が不規則になり、苦しそうなのですが、目をかっと見開いてこの世の見おさめと言わんばかりに父と私の方を見ていました。父が右手を、私が左手を握りしめ、私が時々血圧を測りながら見守っていました。呼吸が不規則になり、血圧はどんどん下がって、聴診器で測れなくなり、手首の動脈の拍動を確認しながら血圧を測り続けましたが、それもやがて触れなくなりました。母の目はうつろに宙をさまよい、焦点が定まりませんでした。私はずっと声掛けをしていました。もう命が尽きることは分かっていたので、今までの感謝をずっと言い続けていましたが、そのうち言うことがなくなり、あの世でおじいちゃん、おばあちゃんによろしく、とか何でもいいので話し続けていました。それでも目を閉じないので、「よく頑張ったから楽になっていいよ」というようなことを話し続けていました。父もずっと話していました。そのうちだんだん手が冷たくなっていき、目線が定まらなくなっても目を閉じずに開き続けているのです。「何か言いたいことがある」と聞いたら口を少し動かしました。全く言葉になっていませんでしたが、「ありがとう」ではなかったかと思います。なかなか目を閉じないので、これは残された父のことを心配しているのだと思ったので、「お父さんのことは兄弟3人でしっかり面倒見るから何も心配しないで、もう目を閉じていいよ」と言った途端に目を閉じて深い息を数回した後に息を引き取りました。最後の瞬間まで聴覚は保たれる、という研修医時代からの教えを実感したのです。

科学的にも証明されてきた臨死での聴覚

2020年のScientific Reportsという雑誌に、亡くなる直前の聴覚を調べた研究が報告されました。対象はバンクーバーのホスピスに入院していた患者さん13名で、入院した時点、および生体反応が落ちて亡くなる前の状態で聴覚の測定をしました。音刺激に対する脳波反応を調べたところ、死にゆく段階においても聴覚はきちんと保たれていることが示されたのです。

親や親しい人を看取る場面は必ずあるものです。そうした場に臨んだ場合、決して不用意な言葉はかけないでください。これから安らかに旅立とうとしている人の前で、遺産相続の争いなど以てのほかです。最後の瞬間まで感謝と励ましの声掛けを是非ともお願いします。

わたなべけんじ
渡辺賢治

慶應義塾大学医学部卒。慶應義塾大学医学部内科、東海大学医学部免疫学教室に国内留学後、米国スタンフォード大学遺伝学教室に留学。帰国後北里研究所（現北里大学）東洋医学総合研究所、慶應義塾大学医学部漢方医学センター長、慶應義塾大学環境情報学部教授を経て、1931年に開設された漢方専門医院、修琴堂大塚医院院長に就任。横浜薬科大学学長補佐・特別招聘教授、奈良県顧問、神奈川県顧問、漢方産業化推進研究会代表理事、日本臨床漢方医会副理事長、WHO医学科学諮問委員、WHO伝統医学分類委員会共同議長等を兼ねる。1900年以来、西洋医学のみだった国際疾病分類の、第11改訂（2019年）に、伝統医療が初めて取り入れられたが、2005年からプロジェクトの共同議長として長年尽力。主な著書に『漢方医学　同病異治の哲学』（講談社学術文庫）、『未病図鑑』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、『漢方で感染症からカラダを守る』（ブックマン社）など。